

心豊かなコミュニケーション力を育むために

～アジア農業高校留学生との交流を通して～

永田 佐智己

はじめに

子供のコミュニケーション能力が不足していると言われて久しい。相手を思いやることが出来ない言動や行動、そして昨今多発している凶悪犯罪低年齢化の一因はそんなことも関係しているのではないだろうか。

群馬県アジア農業高校留学生達とのかかわりを通して私達親が何を見失い、何を次代に紡いでいかなければならないのか振り返って考えてみたい。

1 留学生受け入れ

群馬県ではアジア5カ国から高校生15名を留学生として受け入れ、農業技術や知識の向上を図るという事業を行っている。わが家の長男が農業高校に通っていることと、専業農家であることから今年度、17歳の少年を受け入れる機会を得た。

わが家は高校2年生の長男をはじめ、4人の子供がいる。留学生受け入れは初めて、しかも留学生の母国語はおろか英語でさえままならない私達夫婦は緊張してその日を迎えた。

しかしながら、わが家の子供4人と留学生の少年は硬い表情はしているものの、相手を包みそして、言葉をかけていこうという思いやりが互いに感じ取られた。少年はほとんど日本語を理解できない状況であったため、片言の英語で会話は始まった。

だが、実際少年の心を解きほぐしていったのは、私達の言葉がけよりむしろ子供達がゆっくりと語りかける日本語、そしてジェスチャーであった。

少年が来る前は学校から戻ると比較的自室で過ごすことが多かったわが家の子供達であったが、少年を介して居間に集い過ごすことがもっぱらとなっていた。共通の話題を探り、互いの習慣の違いを時には絵を描くことで補い交流を深めていった。必然的に私達夫婦も子供達と語り、コミュニケーションをもつ時間が増えてきた。一見すると留学生のためにだけ、家族が集っているように感じられるが、その実、その時間は親子にとって貴重なコミュニケーションの場となっていたのだ。

私達大人はある程度の年齢になると「 歳になったのだから」と会話を一方的に打ち切り、あまり話を聞くことをしないで押しつけてしまうことが多々ある。

コミュニケーションを取る事で大切なのは、まず「話を聞く姿勢」だという。現在では共働き家庭が多く子供達もそれぞれの時間を過ごすことが増えてきている。そんな中で私達は「話を聞く」という基本的な姿勢を怠ってしまっているのではないだろうか。そんなことを痛感させられながら日々が流れていった。

2 小学生との交流会

15人の留学生がそれぞれのホストファミリー先で落ち着きはじめた一ヶ月後、小学校での交流会が行われた。

今年度、私が小学校と高校のPTA役員をしていることから両校の先生方に、小学校の子供達に様々な国の子がいることを知らせてあげたいとご相談したのだ。早急な願いであったにもかかわらず先生方のご協力を得る事が出来、民族衣装を身に纏った留学生が訪れてくれた。ただ、急な行事設営だったため特別なプログラムも立てず本番を迎える事になってしまった。しかし15人の少年少女達は私達大人の「大丈夫だろうか」という不安を見事に吹き飛ばしてくれた。

決して流暢ではない留学生達の日本語、しかし恥ずかしがってもじもじしている小学生の手を取り笑顔で語りかける姿は、硬い表情だった小学生達の心をあっという間に柔和させ、そしてつかんでくれたのだった。

言語を補うために、優しい笑顔と言葉で接する、そんな姿に子供達は自然にうち解けていったように思う。ある子は自国の写真を見せてくれ、またある子は日本のアニメーションや文化が伝わってきていることを教えてくれた。腕相撲やダンスを披露してくれる子もいたり民族衣装を小学生に纏わせてあげたりなどの、子供達とうち解けたいと感じさせてくれる留学生達の行為に広い体育館は熱気に包まれていった。

この場合コミュニケーション上、壁となっていたのは「言葉」だった。が、心を尽くし心を砕くことにより相手の気持を触



れ合わせることが出来るのだということを目の当たりにし、私達大人は静かな感動でいっぱいになっていた。

最後は小学生が時間を延長して留学生と遊ぶことに夢中になりサイン会まで行われた。留学生達が綴る、見たことのない美しい母国語にどの子も弾けるような笑顔で応えていた。

日常生活でも様々な「壁」は存在している。そんな時に必要であるのは相手を思い考えそして自分を伝える力なのだと感じた。

3 消費生活の中で

1) 留学生との衝突

3ヶ月間、共に日本語を集中受講してきた留学生達も夏休みを終え、県内8校の農業高校に配属された。この頃になると日本の生活や言葉にも慣れ、それぞれの留学生が新しい生活へと動き始めていった。が、それは同時に私達の消費生活に傾倒していった時期でもあった。有り余る物質、そして遊び。慎ましやかだったわが家の留学生が少しずつ変化していったのだ。

居間に頻りに顔を出していた彼は自室で過ごす時間やインターネットに向かう時間が増え、また与えられたお小遣いを早期のうちに使い切ってしまうなど眼前の楽しみに心を奪われていった。それは成長の証でもあるが全てをその一言で片付けるには躊躇された。

物質は一時的に心を満たし、そして寂しさを紛らわすことを助けてくれる。それによって私達大人もある意味自由な時間を確保することが出来る。子育て中でもしばし遭遇する場面であるが、これではいけないと思いながらテレビやゲームに興じる子供達を黙認してしまっているのではないだろうか。甘く優しい言葉だけではコミュニケーションは成り立たない。時には厳しく、そして相対することが子供達を、そして私達を育てていくのだと考える。

私の注意を初めて受けた彼は戸惑い、そして瞳の奥には怒りを認めた。しかしお互いの感情、考えを吐露することにより、新たな信頼関係とルールを導き出すことが出来たのだ。子供を注意し叱責すると言うことは疲労感を伴うし辛いことでもある。だがその後得られる信頼関係と絆はそのようなことを払拭してくれるものである。

家庭内でも子供と親とのルールは必要だと考える。子供のゲームを止められないなどの声を多数聞くことがあるが、それは私達親側の気持を「個性」「自主性」の呪縛にとらわれ

躊躇しがちになり伝えていないからではないだろうか。真摯な気持を子供達に説き教えるのは大人として当然であると思う。

2) 小学校からの通信

同じ時期、小学校に通う娘が校長室便りを持ってきた。日常の些末なことや先生のお考えなどを伝えてくれる貴重なコミュニケーションツールであるがその日の内容は愕然とするものであった。6年生を対象に行ったアンケートなのだが「自分が死んだら生き返ると思いますか?」という設問に対し「いいえ」と答えた児童が48%だったというのだ。半数以上の児童が「生き返る」もしくは「わからない」と答えたことになる。その理由としてゲームやテレビなどで生き返るシーンがあるからという回答が複数見られたという。この現象は娘が通う学校だけではなくどこの学校でも見られることで特別ではないと結ばれていた。校長先生の心痛は私の心とシンクロし深い悲しみを覚えた。

テレビやゲームは確かに規制しなくてはいけないものも含まれていると思う。しかし、一番の問題点は私達親が誤った「寛容」で包み込み、厳しさを伝えない、つまり物質で満たしてしまうことによるコミュニケーション不足にあるのではないだろうか。核家族化が進み、家庭の中でも個が優先されている風潮を感じる。かつて大家族や地域という括りで自然に培われ養われてきた、考えていく力や心を開いていく力が今は意図していかないと学べなくなっていることも事実だ。子供が自然と育っていくことが難しいと考えた場合、様々な可能性を引き出していくのは私達大人の務めではないだろうか。コミュニティが形骸化されていると言われている今こそ、その基本である家庭で、心を砕きそして大人の気持をも強くしていくことが必要であると考え。

まとめ

留学生と過ごす時間も残り2ヶ月となってきた。お互いの気持を伝えぶつかり合った日々は私達に「家庭」そして「人」の在り方とコミュニケーションの大切さを学ばせてくれ、そして再認識させてくれた。

国が違えば慣習も違う。日本は緑が多いことを感激されたことにわが家は驚き、寒い最中にもシャワーで過ごすことを心配し、時間の流れが違うことに戸惑ってきた。外国の子と過ごしたから心を通わせようと努力したという面は確かにある。特異な経験だったから

こそ感じられたこともあったと思う。だがそれだけでは量れない人と人との接し方を、そして忍耐を私達家族は感じ受け止めている。

人と関わり合うと言うことはそれが例え家族であれ、時には煩わしさを伴うものだと思う。社会で一番小さな集合体「家庭」でコミュニケーションを培う力と壁にぶつかったときのしなやかさを身につけ、地域、そして学校の中でも育てていくことこそ私達大人が今取り組んで行かなくてはならない、そして取り組んでいけることなのだと考える。

凶悪犯罪から子供達を守らなくてはならないという厳しい現実があることも確かであるがそういった力を身につけていくことにより犯罪を生み出さない社会、子供を育成していくということも大切なのだと感じている。明日を担いそして次代を紡いでいくことをこれからも子供達と一緒に考え受け止めて歩いていきたい。

参考文献

教育ジャーナル 2004年7月号

児童心理 2005年8月号